



ANNUAL REPORT 2016

Center for Regional Partnership
Graduate School of Agricultural Science
Kobe University

神戸の風景

神戸大学大学院農学研究科地域連携センター

神戸大学大学院農学研究科地域連携センター
平成28年度 活動レポート

「農を学ぶ。」



Contents

- はじめに 3
- 1. 地域共同研究 5
- 2. 地域交流活動 9
 - 研究会・セミナーの開催
 - 農村ボランティア活動サポート
 - 学生地域活動サポート
- 3. 相談・情報発信 15
- 4. 食農コープ教育プログラムの推進 16
- 組織体制 18

はじめに

地域連携センターの役割

グローバル化がすすむ一方で、超高齢社会をむかえ、地域はさまざまな問題を抱えています。「地方消滅」の危機に対して、「地方創生」がとねえられ、大学には、地域の「知の拠点」としての役割を果たすことが求められています。

農学研究科地域連携センターは、地域と大学をつなぐ連結点(ハブ)となり、課題解決や価値創造を図ることを目的として設立されました。その使命は、1) 農学研究科が有するあらゆる知をもって、地域の課題解決に貢献すること、2) 大学生および地域の人々に、現場での経験に根ざした学習の場を提供すること、そしてその交流の上で、3) 新しい知を創造し、世界と日本の地域の内発的な発展に寄与することです。

地域連携センターは、地域の多様なニーズや課題を、農学研究科・農学部の教員や学生につなげ、共同研究や実践活動として展開させることをサポートする中間支援組織としての機能を果たし続けていきたいと思っています。

ごあいさつ

農学研究科地域連携センターは、神戸大学が教育研究と共に、社会に貢献するために、「地域のシンクタンク機能」「地域で働く人材育成機能」「相談・情報発信機能」等を目的に平成15(2003)年に設置されました。そして平成18(2006)年には、農学研究科と篠山市とで地域連携計画書を作成するとともに、「篠山フィールドステーション」を開設し、今日に至っております。

当センターは、これらの機能を果たすために、主に次の3つの活動を実施しています。まずは、「地域共同研究」です。地域が直面している問題を解決し、地域がより発展するための調査研究を自治体などと共同で進めています。2つ目は、「地域交流活動」です。フォーラムや学習会などの開催を通じて相互理解するとともに、知識を共有し地域の発展につながる活動をしています。また、地域交流を通じた実践型の学生教育にも取り組んでいます(平成23年4月には、これまでの成果をまとめた『農村で学ぶはじめての一步』[昭和堂]を出版しました)。さらに今年度には、篠山口駅に「神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ」を新たに開設し、起業促進プログラム「篠山イノベーターズスクール」(篠山市主催)をスタートしました。3つ目は、「相談・情報発信活動」です。共同研究や地域の問題の相談に応えるなど、研究や活動における事務局業務をするとともに、ホームページなどを通して最新の情報を発信しています。

この『活動レポート』は、平成28年度に当センターが実施した活動を取りまとめたもので、我々の活動の理解を深めていただく一助となるとともに、地域の発展に役立てば幸いです。

地域連携センター長

星 信彦

01 地域共同研究

本センターの研究者が中心となり、自治体や住民団体、NPO、協同組合等とともに、地域の課題解決や持続的発展に寄与する調査研究を行っている。また農学研究科の研究者などが地域と共同で実施する調査研究や事業をコーディネートしている。



まちなかマルシェプロジェクトの 枠組み構築

豊嶋尚子（学術研究員）
阪神ファーマーズまちなかマルシェプロジェクト
会議

阪神地域での都市農業は、消費地や消費者と距離的に近いという販売における優位性がある。その利点を生産者が実感し積極的に活かせる場としてマルシェを開催するのが「まちなかマルシェプロジェクト」の目的である。

今年度は若手生産者と行政関係者を対象に2度の講習会により基礎的な知識を学んだ後、実施に向けたミーティングを重ねた。「現在販路もあるのに、なぜマルシェをするのか」といった問いにも、生産者自身が考え意見交換をすることにより、その答えと自分たちの取り組みたいマルシェの方向性を導き出した。

開催時期、販売品目、会場など条件を検討した結果、マルシェに2度出店し、1月15日には単独でのマルシェ開催に至った。



森(六甲山)街をつなげる環境保全の試み

内田圭介（学術研究員）
CROSS LINK／株式会社フェリシモ／
神戸ワイナリー（農業公園）／
オテル・ド・マヤ／ぶさべじ

昨年度より引き続き本学生団体を中心に行政・企業・地域住民などを巻き込んだの勉強会と、六甲山をフィールドとした堆肥づくりと野菜づくりを行った。

「六甲山勉強会」では、山林が抱える魅力や資源の有効利用などについて、フェリシモなどの地元企業と共催で行い、共有と発信の機会を行政関係者や地域住民と多く持った。

またフィールド活動においても、実際に六甲山にあるホテル「オテルドマヤ」で六甲山の資源を使った土作りを行い、その土を使って無農薬野菜を神戸農業公園で育て収穫物を味わうなど、既存の活動団体と協働で森と街を有機的に繋ぐ取り組みを実践した。またこの一連の取り組みを通じて、林産副産物と言われる落ち葉や剪定枝が、良質な土壌改良材として再資源化・有効利用できることを検証した。



植物性堆肥作りシステムの構築

内田圭介（学術研究員）
CROSS LINK／神戸市内の農家有志／
あいな里山公園／有限会社山高建設／
NPO法人バイオマス丹波篠山

学生団体のCROSS LINKと共に、神戸市内の農家コミュニティと連携して堆肥づくりにチャレンジしている。堆肥づくりに必要な木質資源を北区のあいな里山公園より調達し、それを農家コミュニティで刈り草や野菜の残渣を混ぜながら生産・共有し、各々の田畑への利用、もしくは新規就農者に対して良質な堆肥を用意することを目標にしている。

本年度では、勉強会を開催し堆肥づくりの大切さと将来的なビジョンを共有し、あいな里山公園での落ち葉集めイベントなども企画している。

また篠山市内でも、地元の農林業関係者や建設業者・NPOなどと共同で、堆肥作りをきっかけとした山林のブランディング計画を進めている。



アグロフォレストリーの創出過程に関する研究

板垣順平(学術研究員)
内田圭介(学術研究員)
中塚雅也(農業農村経営学)
(株)坂の途中・認定NPO法人テラ・ルネッサンス

ラオスでは、焼畑農業や木材の産出によって森林面積が減少している。そこで、外部人材の導入による森林に対する資源価値の認識変化や持続的な利用方法、ノウハウなどを構築し、地域に根差したアグロフォレストリーの確立が必要とされている。本研究の中心地となるのは、ラオス北部のシェンクワン県であり、地域連携センター、株式会社坂の途中及び認定NPO法人テラ・ルネッサンスとの共同によりアグリフォレストリー創出の研究をスタートさせる。そこで本年度は、主に各組織の役割と次年度に向けた具体的な活動指標についての協議を進めた。今後、植物のポリネーターの役割を担う在来種のハチに注目し、パイロットプロジェクトとして商品開発や人材育成を進める予定である。



大学構内における木質系資源の再利用の試行

黒田慶子(森林資源学)
内田圭介(学術研究員)
神戸大学施設部

再生が可能な生物資源の有効活用は、循環型社会推進にむけて期待されている。神戸大学の構内においても間伐材、剪定枝、落ち葉といった従来廃棄処分していた木質系の生物資源が多く存在する。これらの廃棄には相当な費用がかかるだけでなく、CO2を排出し環境にも負荷をかける。そこで校内で発生する間伐材、剪定枝、落ち葉について、資源としての評価を行った。その結果、間伐材については製材、剪定枝および落ち葉は堆肥としての再利用の価値が認められた。現在は、有機的なつながりを利用して試行中である。六甲山から作られる製品のブランド力は高く、再利用による学内経費の削減も大いに期待できる。



地域資源マネジメントと地域再生手法の開発

中塚雅也(農業農村経営学)ほか
兵庫県篠山市

地域で育まれてきた建物や景観、歴史文化、自然資源、さらには知識の喪失が危惧されるなか、地域資源の維持管理の方策をその管理主体である地域コミュニティのあり方とあわせて検討することが目的である。

具体的には実践研究の一つとして、兵庫県篠山市、旧福住小学校の跡地活用の計画協議に参画支援した。結果、地域の交流・起業拠点として再生するという方針と、そのための運営体制が定められ、こうした地域の拠点整備推進における要点を考察した。

また、篠山市畑地区では、地域固有種の収集と特性分析、獣害対策イベントの経済評価などをおこない、多様なアクターの連携による農村地域の発展モデルの確立にむけて、調査分析を重ねている(なお、本研究は、JSPS科研費26310309、代表:中塚雅也、の研究成果の一環である)



東播磨地域におけるため池管理の課題と方向性

中塚雅也(農業農村経営学)
兵庫県東播磨県民局地域振興室 ほか

兵庫県には全国一、約38,000のため池がある。ため池が果たす灌漑機能や、生態系維持をはじめとする多面的機能の重要性は改めて述べるまでもない。しかし、農業生産の縮小、農家の減少などにより農業用水として役割は小さくなりつつあり、その維持管理が課題となっている。兵庫県では、直接的な受益農家だけでなく、非農家である多様な関係者が維持管理に参画する「ため池協議会」の設立を推進してきた。この住民参加型のため池管理の実践は、全国でも先進的な取組であるが、今後の継続性には、さまざまな課題が生じてきている。そこで、兵庫県担当者からの起案により、将来を見据えた新たな、ため池維持管理の方針を示すことを目的に、兵庫県立大学、京都大学の研究者らと「東播磨・大学連携研究ユニット」を立ち上げ、研究を進めている。

02 地域交流活動

研究会・セミナーの開催

フォーラムや研究会、セミナー等の開催を通じて相互理解を目指すとともに、知識を共有し地域の発展につながる活動を実施しています。特に地域連携研究会(A-Launch)は、地域での実践活動並びに農学の先端研究・理論に気軽に触れる場、話題提供者と討論する場として地域連携センターが主催で実施しています。そのほか、企業や自治体との共催でセミナーを開催しています。

実施の概要

地域連携セミナー（2016年8月18日） / 会場：神戸大学梅田インテリジェンスラボトリ

講師：中塚雅也（食料環境経済学准教授）

地域連携研究会「第14回 A-launch」（2016年11月18日） / 会場：神戸大学大学院農学研究科地域連携センター

講師：藍原祥子（応用生命化学助教）

スローフードセミナー（2017年1月12日） / 会場：神戸大学農学部 B101

共催：神戸市、スローフードインターナショナル

森の学び舎（2017年1月30日） / 会場：フェリシモ本社21Fプラットフォーム

講師：黒田慶子（応用植物学教授） 共催：フェリシモ



地域連携セミナー（2016年8月18日）



地域連携研究会「第14回 A-launch」（2016年11月18日）



森の学び舎（2017年1月30日）

農村ボランティア活動サポート

地域連携センターは、農村ボランティア「ノラバ」の事務局として、ボランティアを必要とする農家と大学生のマッチングを行っています。2016年度末の全体登録者数は591名です。

今年度のマッチングは53件で、昨年度より14件増加しました。学生と一般をあわせたボランティア参加者を属性でみると、男性は40代が一番多く8名、次いで女性は20代が7名となっており、年齢・性別によらず幅広い参加がみられました。

「ノラバ」

農業をやりたい
農業・暮らしごとをサポートしたい
有機農業や環境に興味がある
豊かなむらと自然を守りたい



農村ボランティア BANK

学生地域活動サポート

地域連携センターでは、学生による地域活動について、活動の一般公開、地域との情報共有、PR等に関する支援を行っています。今年度、支援した学生団体は6団体(ささやまファン倶楽部、にしき恋、サンセット12、AGLOC、CROSS LINK@653、ぶさべじ)です。

篠山市において活動を行う団体は、相互の情報共有を図るため、「篠山学生活動団体連絡協議会」(篠連)を組織しており、本センターはその運営を支援しています。

2013年度から、学内において、学生団体が農家とともに生産した農作物(黒大豆等)を直売する場として「ささやま家(や)」を設けており、今年度は4回開催しました。「ささやま家」は、生産から販売までの過程を経験する機会であり、学生団体は交通費等の活動資金として販売収益を活用しています。

地域連携センターでは、学生が地域でおこなう様々な活動について、相談・助言、ミーティングスペースの提供、備品レンタルなどを通して、サポートしています。本年度にサポートした主な活動を紹介します。



地域農産物販売によるPR活動

【にしき恋】

篠山市西紀南地区において学生が育てた特産物の黒枝豆を、神戸大学学内や都市部のマルシェで販売しました。また、他大学の農業系サークルと連携し、黒枝豆を用いたどら焼きのレシピを考案し、マルシェに出品しました。



地域での交流イベントの実施

【にしき恋】

活動地域である篠山市西紀南地区において、住民の方を招いての懇親会、小学校へへの出前授業、小学生との交流会などを行いました。交流を通じて、学生団体の取り組みへの理解を深めています。



田んぼビオトープの橋づくり

【ささやまファン倶楽部】

篠山市真南条地区において貴重な野生生物が息する田んぼビオトープを整備しています。自然環境に極大負荷を与えず安全に楽しく観察できるよう、昨年度に引き続き、橋づくりに取り組みました。



「丹波の赤じゃが」の普及活動サポート

【ささやまファン倶楽部】

篠山市真南条地区では、神戸大学農学部とともに開発した「丹波の赤じゃが」を利用した加工品開発や農家レストランなどの事業が展開しています。それらを広く知ってもらえるよう農作業や販売をお手伝いしています。



地域のまつりの活性化を考える

【サンセット12】

篠山市日置地区において、古くから行われてきた地域の祭礼や行事の運営のお手伝いをしています。こうした活動を通じて、若者・よそ者の視点から、地域のまつりの継承のあり方について考えています。



六甲山の環境保全活動

【CROSS LINK】

六甲山の環境保全に関わる勉強会を開催し、実践として、土づくりや無農薬野菜の栽培、販売まで行っています。勉強会では、大学教員や神戸市職員、および関係事業者をはじめ、様々な参加者の関わりがありました。



「食と農林漁業大学生アワード2016」への参加

【AGLOC】

農水産省主催の食や農林漁業に関わる取組みを行う大学生グループの活動発表コンテストにファイナリストとして選出され、日頃の活動内容や成果について発表しました。



留学生と農村地域の交流促進

【AGLOC】

農村地域の課題に留学生とともに取り組むことを目指し、篠山市岡野地区で農業ボランティアを行っています。また、留学生と、地域での国際交流や、地域の魅力を世界に発信するイベントを企画・実施しています。



学生と農家の交流の場づくり

【ぶさべじ〜ぶさいく・べじたふる〜】

野菜を見た目に拘ることなく販売したり、それらの野菜を用いた料理で食事会を開いたりしながら、農家さんと学生とが繋がる場の創出に取り組んでいます。

03 相談・情報発信

ホームページ等による情報発信

地域連携センターHP(<http://kobe-face.jp/renkei/>)で、共同研究の内容や地域交流イベントの告知・レポートなどの情報を発信したほか、食農コープ教育プログラムHP(<http://kobe-face.jp>)では授業レポートを発信しました。また、学生や地域の方々が日常的に地域連携センターの情報に接しやすくなるようfacebookとtwitterでの情報発信も行っています。

オフィスアワーの実施

地域と農学研究科をつなぐ窓口として、情報の受発信を行い、各種相談に応じています。2016年は53件の相談が寄せられました。主な相談者は、地域企業16件、大学生・大学院生14件、地域団体8件、行政職員7件、大学教員6件でした。

相談内容は、学生地域活動についての相談、イベント告知への協力、農学部への共同研究への問い合わせのほか、本センターのコーディネーターへの事業協力やアドバイス依頼も多く見られました。

オープンキャンパスでの展示

2016年8月10日に実施した神戸大学農学部のオープンキャンパスにおいて、本センターが推進している食農コープ教育プログラムのブースを設置し、カリキュラムや授業内容をパネルで紹介しました。そのほか、食農コープ教育の授業を通じて結成された学生活動団体のパネルも展示し、所属する学生が活動紹介を行いました。大学生の生の声を聞き、食農コープ教育やそれを推進する地域連携センターについて多角的に知る機会としました。

04 食農コープ教育プログラムの推進

神戸大学農学部では、食や農の現場において課題解決に貢献できる人材の育成を目指し、「食農コープ教育プログラム」に取り組んでいます。本プログラムでは、生産者や生活者の視点から地域の課題を学び、学部教育で培った専門性と結びつけながら、課題解決に向けて取り組むことができる人材の育成を目指しています。

地域連携センターでは、本プログラムの推進主体として、協力教員とともに、次の3つの科目を担当しています。

実践農学入門 [1年：通年]

兵庫県内の農村地域において、地元農家を指導員として、農作物の栽培や、さまざまなむら仕事を体験しながら、農業や農村生活の理解を深めます。

今年度は、大芋活性化委員会(兵庫県篠山市大芋地区)に受入れていただき、45名の学生が11戸の農家のもとで実習を行いました。黒大豆の栽培をテーマとし、校内学習3回、実習5回、現地での活動発表を行いました。また、学生は、地域行事や農業ボランティアにも参加しました。

実習

地元農家のもとで黒大豆の栽培に携わり、農業農村を体験しました。



校内学習

実習の経験や知見をもとにワークショップを実施しました。



現地での活動発表



実践農学 [2年：通年]

持続可能な農業農村の発展に関する現場で、調査やインターンシップ型のプロジェクトに参加し、実践的な学習を行い、農村地域の産業・環境・社会を理解する基礎的な技術や能力、および企画立案や調整の能力を身に付けます。

今年度は37名の履修がありました。森づくりグループは、神戸市北区と兵庫県篠山市において里山林の植生調査を実施し、得られたデータをもとに、里山管理の手法について地域への提案を行いました。インターンシップ型グループは、篠山市日置地区、篠山市岡野地区、篠山市役所、篠山市地域おこし協力隊、グリーンファームささやま、JA丹波ささやまの直売所を受入れ先として、演習へ参加し、各々のプロジェクトで企画立案を行いました。



森づくり



都市農村の交流の場づくり



山の芋普及啓発



ふるさと納税推進



準・協力隊活動



農作業支援体制改善



売り場改善

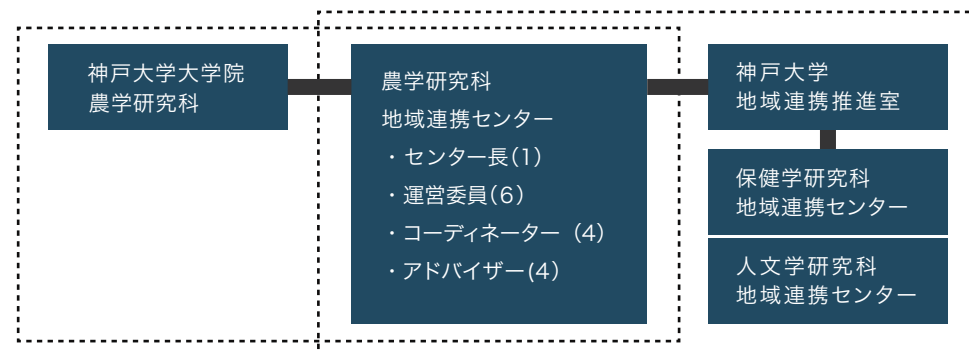
兵庫県農業環境論 [2年：後期]

兵庫県の農林水産業の施策や事業に関わる方々から講義を受け、日本における兵庫県の農林水産業の位置づけ、現状と課題、政策展開を正しく理解し、批判的に評価したうえで、適切な対策を提案する力を養います。

今年度の授業では、兵庫県農政環境部やJA兵庫中央会の職員の方々によるオムニバス形式での講義を実施し、「耕作放棄地の再生・活用に向けた取り組みについて」、「兵庫県認証商品のファンづくり」をテーマとして施策提案のワークショップを行いました。なお、履修者は66名でした。

組織体制

地域連携センターは、農学研究科及び神戸大学地域連携推進室の協力のもと、センター長を中心に運営委員が管理運営に関する事項を審議し、常勤および非常勤の地域連携コーディネーターが、農学研究科教職員や各種地域団体との連携を図りながら事業を推進しています。また、学内外の幅広い知見や情報、それに基づく助言を得るためアドバイザーを置いています。



【平成28年度スタッフ】

センター長	星 信彦 (応用動物学 教授)	
運営委員	庄司浩一 (生産環境工学 准教授)	中塚雅也 (食料環境経済学 准教授)
	横山俊史 (応用動物学 助教)	黒田慶子 (応用植物学 教授)
	藍原祥子 (応用生命化学 助教)	土佐幸雄 (農環境生物学 教授)
地域連携 コーディネーター	木原弘恵 (特命講師)	豊嶋尚子 (学術研究員)
	内田圭介 (学術研究員)	山野ゆかり (事務補佐員)
アドバイザー	加古敏之 (神戸大学 名誉教授)	伊藤一幸 (神戸大学 元教授)
	高田 理 (神戸大学 教授)	内平隆之 (兵庫県立大学 教授)

神戸大学大学院農学研究科地域連携センター

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 A103

078-803-5939

ans-chiiki@edu.kobe-u.ac.jp

オフィスアワー：水・金 13時～16時